

本年度の入試問題について、たくさんの方に問題に直接触れている編集委員が率直な感想を述べます。
(太字の出典は、本問題集に採録)

現代文「小説」

今年の主な主題と大学名を挙げていく。**12**東北大は須賀敦子の『となり町の山車のように』の全文であった。須賀敦子は様々な経験を積みながらそれを作品として描いている。**10**筑波大は森浩美の『家族連字』の連作短編の中からの出題であった。連作の中で『新潮』に掲載された作品を使っている。連作の中で最も文芸性が高い作品である。**16**東京大は谷川俊太郎の『詩を考える——言葉が生まれる現場』からの出題。まさしく詩が生まれる瞬間についての作者の実感が描かれている。**15**京都大は小山清の『井伏鱒二の生活と意見』で、ここでも文学者の人となりと表現とのかわりが述べられている。**14**大阪大の文学部は島木健作の『バナナの皮』で、社会正義を体現しているかのように残酷なまでに若い囚人をいたぶる傲慢な田舎紳士への憤りが主題である。**11**岡山大は木下捷平の『うけとり』で後に『初恋』と改題されるように少年の淡い恋心と何も知らずに高説を垂れる校長との対比が面白い。**18**広島大は竹西寛子の『五十鈴川の鴨』であった。広島大らしく原爆文学からの出題であった。問4・問5・問6の本質への深い設問で受験生の読みが一気に深まっていくように丁寧に出題されていたのが印象深い。

今年の大まかな傾向としては、随想には文学作品がいかんにして生み出されるようになってきたのか、またはその生まれる瞬間がどういうものであるかを述べてあったり、全体的に文学への志向が強い出題が目についた。また小説においては理不尽なものへの怒りが描かれているものが目立った。理不尽なものとは、貧困であり、原爆であり、無理解な教師であり、安全圏に自分を置いて弱いものをなぶるような人間である。個人的な感想としては出題者には文学のすばらしさを訴え、文学的なものを理解しようとしないうものへの怒りが感じられた。国語を「論理」と「文学」と安直に分割したことに対する抗議の気持ちがあるのではないかと邪推してしまう。少なくとも「論理国語」だけでは今年の入試問題に対応するのは困難な気がする。

古文

今年も例年と同様、読み取りに苦労する難解な本文の出題は少なく、平易な文章を出題し基本的な読み取りの力を測るという姿勢は継続している。

センター試験では擬古物語の『小夜衣』が出題されたが、国公立二次試験での擬古物語の出題はほぼ影を潜め、説話は相変わらず「ノスタルジック」に出題されている。**7**熊本大『沙石集』、**10**鹿児島大『古今著聞集』、**11**東北大『続古事談』、**16**大阪大『発心集』などのだが、今年度の顕著な傾向としては、教科書に必ず載っている、あるいは文学史を学習する上で必須の有名出典からの出題が多く見られたことである。例を挙げると、毎年必ずどこかの大学で出題される『源氏物語』(今年**14**筑波大が出題)は別格としても、静岡大『伊勢物語』、大阪市立大『うつほ物語』、**1**北海道大『軍級日記』、**4**名古屋大『和泉式部日記』、**9**岐阜大『建礼門院右京大夫集』、**2**神戸大『讃岐典侍日記』、**3**新潟大『十六夜日記』、**19**九州大『夜の寝覚』などである。ストレートに文学史が問われた場合はもちろんのこと、本文読解の上で作品の背景を認識しているほうが有利なのは言うまでもない。普段の学習(授業)の重要性が再認識されたと言へるであろう。しかし、一方で**8**金沢大『小教盛絵巻』や**12**東京大『春日権現験記』のような絵巻物の詞章からの出題や、**5**千葉大『紫の一本』などのように、受験生がおそらへ初めて目にするであろう作品からの出題もやはりある。

上に述べた傾向分析から受験生に望むことは、普段の授業を通じて基本事項(文法・単語・連語・慣用句など)の習得を心がけ、その上でさまざまなジャンルの文章に目を通し、古文を読み慣れることであろう。もちろん読み取ったことを設問の指示どおりにアウトプットする記述力が必要なのは言うまでもない。取り上げた作品の多彩さからいっても、解答作成のノウハウを掴む上でも、この問題集は期待に応える内容を備えているので、充分に活用してくれることを願ってやまな。

評論

本年度はまず東日本の大学では、機会均等と自由競争による平等を建前として、現実の格差を隠蔽する近代社会の欺瞞に対する批判(**25**東京大)、平等の理念のもとで、平等と均質を混同し、人間を交換可能な部品として社会に隷属させた近代社会の矛盾の考察(**19**名古屋大)、仕事の場面で不適切な情動を強いられる感情労働についての提言(**22**橋大)、ひたすら利潤追求による自己拡大を目指す資本主義社会において「待つ」ことを拒む現代人のあり方の問い直し(**4**新潟大)、将来、Aの正確無比さが人間から自己肯定感を奪うことへの警鐘(**7**津田塾大)といった文章が出題された。以上は、現代社会が抱える問題と強く関わる文章であった。中でも東京大の文章はジャーナリズムにおいても話題になった文章であり、東京大があえてこの文章を入試で出題したのは、現代社会の抱える大きな矛盾に目を向けてほしいという、大学から受験生へのメッセージが込められているのではないだろうか。

またほかに、現代社会の諸問題の萌芽を生み出した「近代」について論じた文章も複数出題された(**9**金沢大・**17**北海道大)。

次に西日本の大学では、あらゆる分野で自らの依って立つ基盤や到達点そのものを疑い、根本的な問いかけの中で新たな再生を目指すという内容の文章が数多く出題された。世界が様々な想定外の危機に見舞われていることを反映しているかのような様相である。たとえば、言葉の限界性を自覚しつつも人間の真実を伝える手段としての新たな可能性を模索する文章(**24**京都大)、近代日本を自ら相対化して世界的な流れのなかで捉え直すべきだと主張する文章(**18**大阪大)、古典や文学史が現代に果たす役割を定義し直そうとする文章(**23**神戸大)など、ジャンルは違えど、今までのことを一度整理して再出発を期すことの重要性を述べるものが多い。「尊厳死」や「延命治療」について考える前に「尊厳ある生」を問うべきだと説く文章(**8**広島大)、「敵／味方」を峻別する二元論の問題点を指摘する文章(**20**九州大)、工業技術を用いるレベルから人間存在そのものを問うものに高めるべきだとする文章(**6**首都大学東京)なども、広い意味でこの系譜の中にある。「正しい現状認識に基づき、時代を切り拓く新たな知の創出ができる人間」を大学側が求めているようである。

漢文

本文の分量は一部の大学を除き、一ページ以内に収まっている。内容はさらに易化が進んでいる。ジャンルや出題方法など各大学の傾向も大きい変化はない。

出題については、語句の読み・意味や句法・用法の知識が基本となる。再読文字は必ず覚えておくこと。反語や使役、受身、限定、比況、比較も出題されるので基本の用法は理解しておく。漢文特有の語彙は読みが問われることが多い。また、本文につけられている読みや送りなどもヒントになる。記述の量は、名古屋大で一五〇字の記述がある他は長くて六〇字程度で昨年度と変わらな。ただ、傍線部の説明を求める問題でも、本文全体を踏まえて書くべき場合もあり、どこまでまとめるのかを判断する必要があるだろう。また、対句的な表現にも注目すること。もちろん、本文だけでなくリード文や注は解答のヒントになるので必ず読み、理解の助けとしたい。特に中国独特の文化(「字」など)やその時代背景が関わる問題は、リード文や注をしっかり読む必要がある。また、今年はい「臥薪嘗胆」(大阪大『誠意伯文集』)や「曲水」(の宴)「筑波大『世説新語』)、「髀肉の嘆」(21)広島大)など、漢文の知識があると解きやすい問題が出た。句法・用法の学習だけでなく、多くの文章に触れ日頃から漢文の世界に親しんでおきたい。

随筆・評論にあたるものでは、『古文真宝後集』(**19**大阪市立大)、『竹窓随筆』(金沢大)などが出題された。岡山大『日本雑事詩』では中国から見た日本が描かれている。説話的文章や逸話を紹介した『棠陰比事』(北海道大)、『東齋記事』(東北大)、『人虎説』(18)岐阜大)、『韓詩外伝』(お茶の水女子大)、『搜神記』(佐賀大)、『閻微草堂筆記』(長崎大)などが出た。「思想」にあたる文章は『淮南子』(千葉大)、『新序』(香川大)、『伝習録』(鹿児島大)などが出題された。詩は北宋の梅堯臣の詩「懷悲」(新潟大)や21)広島大)、『三國志』の内容を踏まえた清代の詩が出された。押韻・対句など詩の基本事項は確認しておくこと。歴史では前出の『三國志』や『漢書』(22)東京大)、『資治通鑑』(23)九州大)、『史記』(20)滋賀大)なども多く出された。日本漢文は『小原翁紀徳之碑』(岩手大)、『日本外史』(信州大)が出題された。『貞観政要』(17)神戸大)などの言行録も毎年出題されている。古文との融合問題は、今年はほとんど出題されなかった。